



ティー・ブレイク

NO.79

釣り堀メランコリー

東京暮らしも早7年目を迎えた。上京してまず驚かされたのは、都心における緑の豊かさである。例えば、四ツ谷から飯田橋にかけて、JR中央線・総武線の線路を見下ろす土手には木々に囲まれた遊歩道が整備されている。この遊歩道の周りは春には桜が、秋には銀杏が茂り、とても「いい感じ」となる。したがって、この遊歩道を、よく晴れた日に自転車で疾風のごとく駆け抜けるのはまさに爽快であり、雨の日にちょっと気に入った女の子とのんびりと歩くのもまた愉快である。

そんな遊歩道の中間地点、JR市ヶ谷駅ホームの正面にそれは存在する。釣り堀である。東京在住又は勤務の方であれば一度くらい見たことがあるでしょう、江戸城跡のお堀の一角をコンクリートで固め、複数の長方形の池を擁するあの釣り堀を。また、在京テレビ局制作のテレビ番組で釣り堀シーンが出てきた場合、おそらくそれは市ヶ谷の釣り堀である。

その釣り堀を訪れる客層は、老人、カップル（「カップル」って死語？）が5:1の割合で殆どであり、休日にはこれに子供連れのお父さんが加わる。

老人はマイ竿、マイえさ、マイ椅子を持ってくる。おそらく釣り堀の中でマイポイント（釣る場所）も決まっているのであろう。マイ竿の仕掛けには老人の釣り人生に裏打ちされた独自の工夫がなされ、マイえさのブレンドにも独自のノウハウが生かされている。その結果、魚籠はたちまち大きな鯉でいっぱいになる。しかし、老人の丸まった背中がどこか寂しげでもある。

カップルは大体、男の方が知ったかぶりをしてあれこれ女の子に指図する。その指図の仕方が、いかにも「釣りも上手いアウトドアな俺をアピール」みたいな雰囲気を漂わせ、嫌な感じだ。しかも釣りは下手で、全く釣れていないからいけてない。ケツ、こんなところでいちゃつくな。

お父さんは大変である。二人や三人も子供を連れてこようものなら、てんてこ舞いだ。一人目に釣りえさをつけてやってると、二人目が釣り糸を絡ませた、と思ったら、三人目がおしっこをせがむ。自分自身は全く釣りができない。平日仕事で疲れて休日これじゃあちょっと痛ましい。

こんな風に、私は仕事柄、必要以上に養われた批判的観察眼で釣り堀を訪れる人々を眺めていると、意図せずその眼はゆらゆら揺れる水面に映った自分へと向けられた。

「ところでそう言うオマエはどのセグメントにも属していないじゃないか。」

確かに周りを見渡しても、私くらいの年代の男性が独りで釣り堀に来ているのは、今日も、以前にも見たことが無かった。独りで釣り堀に来ているオレって幸せ？ いずれカップルでこの釣り堀を訪れ、次にお父さんになって、そしてしばらく釣りを忘れるくらい働いて、その後老人になって再びこの釣り堀に戻ってくるのかなあ。

そんなことをぼんやり考えながら釣り糸を垂れる。釣り堀の中から大きな鯉がこちらを向いて「ニヤリ」と笑った。三十路独身男、やわらかな休日の出来事であった。

（たら）